

挑戰

stright

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも少しでも歯車が違っていたらどうなっていたんだろう？

ある選手の性格を少し変えてみました。

これはもしもの物語。

目次

2	1
17	1

全国中学校バスケットボール大会。通称全中。この日は昨年の大会で出会ったライバルと対戦できる特別な日だった。そいつは地区が違うために全国以外での対戦がない。だからこそ戦える事が嬉しかった。前回の対戦はほぼ互角。今日は待ちに待った決着をつけるために、朝から気合いが入っていた。最高の勝負ができる。ただただそのことが楽しみだった。

その、筈だった。

スコア150対81。残り3分で71点差。

勝負なんて出来ていなかった。圧倒的なまでの実力差。初めはただ強くなったと思っただけだった。でも時間が経つにつれて理解させられた。理解、してしまった。

——こいつには、勝てない。

● ● ●

青峰大輝は退屈だった。中学2年になってから、自身の才能が開花し、対等に勝負できる相手がいなくなった。多少本気を出すだけでついてこれなくなる。次第に勝負に対する熱が薄くなつていくのを彼は感じていた。

——青峰くんより凄い人なんてすぐに現れますよ。

相棒はこういったけれど、決勝リーグに来るまでに自身と戦える者など出て来なかった。それでも今日の対戦相手は去年は互角だった、ライバルだと思っていた奴であったため楽しみにしていた。

結果は、圧勝。

(なんでだよ……！ お前とならいい勝負ができると思ったのに……!?)

こんなものなのか。自分と戦えるやつなんていないのか。

(……ああ。そっか。オレに勝てるのは——)

史実通りであれば彼はここでバスケットに対して失望し、影^{黒子}とも決別する。そして高校生の冬、影とその光の率いる高校に敗れるまで絶望したままだった。

しかしこの物語は、

「おい。青峰」

「……あぁ？」

「まだ、試合は終わってねえぞ」

……で終わらない。

「勝手に終わった気になってんなよ」

「まだあと3分もある」

「まだまだ諦めねえぞ……!」

本来であれば彼はその才能の差に絶望し、彼の^{青峰}_{大輝}の人生の歯車を狂わせるきっかけを作ってしまう筈だった。

「……バスケに一発逆転はねえよ」

「んなことわかってるさ。でもここで諦める理由にはならねえだろうが」

しかし彼は違った。

「試合どうこうっていうだけじゃない」

「ここで大事な勝負を投げ捨てるわけねえだろ」

「勝負つてのは諦めた方の負けだ」

「俺はまだ諦めてねえ……!」

及ばないことがわかっていても、手を伸ばした。

「このままじゃ終わらせない」

「いくぞ! 青峰!」

これは才能差を理解しつつもあがく——

「……ハッ。ぬかせバアカ」

——凡人の物語。

「監督。アメリカに行つてきます」

「は？」

あの戦いから一週間。俺、井上智也は中学の体育館でいつものように練習をしていた。俺の通う上崎中学校は全国でも有数のバスケの強豪校であり、今年の全中においても優勝を期待されていた。

結果は惨敗。まさに手も足もでなかった。

俺たちの中学に勝つたのは、中学バスケット界において長年頂点に君臨している帝光中学校。特に今年にはキセキの世代とまで呼ばれる2年生がスタメンになり、圧倒的な力を持っていた。

彼らはその力を見せつけ、順当に優勝を決めた。

キセキの世代と呼ばれているのは5人。P G 赤司征十郎。S G 緑間真太郎。S F 黄

瀬涼太。PF青峰大輝。C紫原敦。その中でもエースと呼ばれている青峰大輝は昨年までは自分とあまり力の差はなかった。しかし彼はその才能の開花と共に、最強のスコアラーへと成長した。一試合50得点を当たり前のようにするような存在になった。

彼と戦い、俺は一回も勝てなかった。

その才能に嫉妬し、一度は匙を投げかけた。

でも、それは試合の中での彼の目を見て変わった。

(なんだその目は。その悲しげな目は)

哀しげに寂しげにこちらをみる彼の姿。

——悔しかった。

(俺は、まだ終わってない。まだ終わりにじゃない！)

あの日あの時あの瞬間。目標が定まった。

(もつと力がほしい。もつともつと力が！)

それからは自分がこれから何をすれば良いのかを考えた。今の自分に足りないものや必要なこと。ありとあらゆるものを考えた。

全ては、あいつに勝つために。

冒頭に戻る。

「アメリカだと？」

「はい」

「どういうことだ？ 説明しろ」

「俺はあれから自分がどうすればいいのかを考えました。あの試合での力の差は歴然だった。力も速さもシュートの精確さも」

「……………」

「このままじゃダメだと思いました。今のまま漠然と練習していても、あいつには届かない」

「だからこそ刺激が欲しいんです。自分よりも強い相手と戦うための、経験がほしいんです」

「そのためにはアメリカが一番だと感じました。あそこならストリートといった場所です。色々な相手と対戦できる」

「これから先負けないために。なによりも」

「今の自分が前に進むために。…あいつに、勝つために。必要だと。そう思いました」

「……青峰か」

「はい」

上崎中学校監督多田野裕二は考えた。これをどのように受け止めるべきなのかを。彼が勤めているこの中学のバスケット部は強い。鼻屑目ではなくそう思う。特に今話している井上は特にセンスがあり、一年生の頃から主力として使い続けてきた。

そんな彼をもつてしても歯が立たなかった。

帝光中学校バスケット部エース青峰大輝。史上最強と名高い今のチームでスコアラーとして活躍している。一年前は互角だった。この二人の対決は面白く、それでいて華があつた。だからこそ、今年の対決も彼らの勝負次第であると多田野は考えていた。

そんな想像をあざ笑うかのように、青峰は圧倒的に彼を倒した。

試合はダブルスコアで惨敗。現3年生は失意のまま引退していった。その目には涙はなく、絶望しかなかった。彼らは、もうバスケットはしないらしい。

しかし、井上は違った。

試合中何度抜かれても何度止められても、決して諦めなかった。序盤から大差をつけられ、もう勝てないと本人も感じていたであろうに最後まで向かい続けた。

眩しかった。

試合後に彼に尋ねた。何故最後まで諦めなかったのかと。指導者失格の問いではあるが、聞かずにはいられなかったのだ。

目尻に涙を滲ませながら、彼はこう答えた。

「……負けたくなかったからです」

「試合にか？」

「それもありませんけど——」

「——自分に、です。やっぱり俺バスケットが好きなんで。……好きなものに嘘つてつき

たかないじゃないですか」

「あそこで諦めたら今まで頑張ってきた、好きなバスケットに申し訳ないですし」
「バスケットに失礼なこと、したくなかったんで」

それを聞いて彼は思った。

(強いな。とても)

あそこまでの実力差。点差以上に心にダメージを負っただろう。ましてや相手は一年前は互角だったライバルだった男だ。誰よりも何よりも井上自身が、普通なら耐えられない程の絶望を味わったはずだ。

それでも、勝ちたいと。

自分には、負けられないと。

彼はそう言ったのだ。

(まさかこの年になって選手にこんな大事なことを教わるとはな)

今、目の前で自分を見つめるこの少年はきつと誰よりもバスケットが好きで、誰よりもバスケットを愛しているのだ。

その彼が新たな一步を踏み出そうとしている。

後押しをしない理由がなかった。

「わかった」

「……え？」

「行ってこい。アメリカに」

「いいんですか」

「必要だと思ったんだらう？今の自分に。前に進もうと思ったんだらう？これから先に」

「なら行ってこい。そして、大きくなって帰ってこい」

「……っはい！」

そうだ。これでいい。あとは彼を信じるだけだ。

このチームのエースである彼を。



渡米当日。ついにアメリカに行くときがやってきた。監督に意志を伝えた後すぐに部の皆への説明を済ませた。初めは戸惑っている人も多かったが、最後には納得してくれた。

「お前ならやれるさ」

「あの試合を見てた俺達ならわかる」

「頑張つてこいよ」

「俺らもお前に負けないように、頑張るからさ」

彼らは俺に期待をしてくれた。

(ちゃんと応えないとな)

アメリカに行くための伝手は監督が用意してくれた。自分で行く方法を決めていなかったことは、監督に呆れられた。しかし呆れながらも向こうに行くための準備までしてくれた。学校に要請して短期留学の為の枠を確保してくれた。

これは上崎中学校にある交換留学の制度を利用したもので、今年は制度に申請した人がいなかったためにすんなりと話が進んだ。

目的地はロサンゼルス。期間は3ヶ月。

(監督にも感謝を。絶対に強くなって帰ってきます)

やることはわかっている。行動はもう始めた。

あとはただ突き進むだけだ。

「よしっ。いかー！」

タイムリミットは来年の夏。おそらく、あいつももっと強くなっているだろう。やるべきことはたくさんある。時間はいくらあっても足りない。それでも。

「やってやる……！」

あいつに勝つために。

自分に、負けないために。

心のモヤモヤを晴らしに行こう。悩むのはもう飽きたから。

「待ってろよ」

青峰。

——ロサンゼルス某所。

「はあ、はあ、はあ」

「どうした智也。もうギブアップか？」

「まさか。まだまだ行くぜ。辰也さん！」

「……そうこなくちやな」

渡米から約一か月。俺は今新たなライバルと共に練習に励んでいた。

彼の名前は氷室辰也。俺より一つ上の先輩。ここロサンゼルスに存在する大きな2つのチームのうちの1つでエースを張っている人だ。

こちらに来た当初。右も左もわからない状態だった俺ががむしやらにストリートでバスケットをしていた時に、親切に声をかけてくれた。彼は小学生の頃からこちらにいたためにこの地域のバスケット事情に詳しく、色々と相談に乗ってくれた。

話をしていくうちにこの辺りでは珍しい日本人同士だということと同じバスケットを愛する者として、意気投合していった。

以来こうして毎日のように1 on 1をするような仲となり、お互いにしのぎを削り

合っている。

戦績は5：3で辰也さんが勝っている。彼のプレイは基本に忠実で一つ一つのプレイが洗練されており、一瞬本当にそう動いたんじゃないかと錯覚するほどのリアリティを持ったフェイクなども合わさってなかなか止めることができないのだ。

青峰とはまさに対極のプレイスタイル。これほどに美しいプレイを見たのは初めてだった。

しかし

(くそつ。こんなんじやダメだ。まだまだ力が足りない)

辰也さんとの対決や日々のストリートでの戦いの中で俺自身の技術や経験も上がってきている。

だが、これではまだ青峰には遠く及ばない。

(アメリカにいられるのもあと2か月しかない。これではまだこれまでの延長のままだ。……俺はまだ自分を変えることができていない)

勿論充実感はある。今まで手に入れることのできなかつた経験を得られたし、本場のバスケットに触れることでいい刺激を受けた。でも未だに辰也さんを止めることができない上に、自分の新しいスタイルのきつかけすら掴めていない。

正直、焦っていた。

「——。——也」

(このままじゃダメだ。どうすれば……)

「智也！」

「っ！はい」

「どうした。何かあったのか」

気が付くといつの間にか辰也さんがこちらに近づいてきていた。

「いえ。何も」

「嘘つけ。急に静かになっていた癖に。……少し休憩するか」

「……はい」

お互いいったん勝負を中断し、コートの手端によって並んで座った。

持ってきていたスポーツ飲料を飲み一息つく。買ってきてから時間が経っていたこ

ともあり、少しぬるくなっていた。

俺が落ち着いたのを見てから、辰也さんは訊ねてきた。

「どうかしたのか」

「……」

「今日は初めから何か変だった。いや、今日に限った話じゃない。最近はいつもそうだ。

勝負をしていても急に動きが単調になったり、精彩を欠いたりしている。プレイ自体に

もどこか焦りのようなものを感じる」

「……すいません」

「別に責めているわけじゃない。だが今のままで練習を続けていても得られるものは少ないだろう。オレにとっても、君にとっても」

「……はい」

その通りだった。ここ何日かは自身の中から生まれる焦燥感に掻き立てられ、プレイが雑になりかけていた。

練習をしても、自分の想像の範囲を超えない。

戦っていても、思ったようなプレイができない。

それなのに時間は刻々と過ぎ去っていく。

(わかってるんだ。こんなことじゃいけないってことくらい)

だというのに焦りばかりが先だって、集中しきれていない。

これぞ本末転倒。自業自得だった。

(なんとか、なんとかしないと)



——どうしたものか。

氷室辰也は目の前で悩む友人に対してどうすればよいのかを考えた。友人である彼、井上智也は不思議な奴だった。

彼と出会ったのは約一ヶ月前。いつも通りに週末の試合に向けて練習をしている時に、チームメイトからあるうわさ話を聞いたことがきっかけだった。

強い東洋人のストリート破り。

彼の住むロサンゼルスには東洋人はあまり住んでいない。同年代の男子ということであれば自身を除けば数人ほどだ。その中でバスケをしている者となればより限られてくる。何よりこの辺りのストリートで勝つことができるほどの実力者となれば、彼には覚えがなかった。

……いや。ただ一人思い至るやつがいた。

(まさかタイガか……!?)

数週間前自分の前からいなくなった、弟のような存在だった男のことを思い出す。

——タツヤ、オレはタツヤの敵になりたいんじゃない。ただ今まで通りに……。

——次の試合、思い出^{リング}をかけろ!

——そんな……。それって……。

——逃げるなよ。タイガ。

(戻ってきたのか。タイガ)

実の弟のようにかわいがってきたあいつは、いつの間にかオレと同等の力を手に入れ

ていた。小学生の頃にあった差など、中学になって初めて戦ったあの日にはもうなくなっていた。勝負をする中で勝ち負けを繰り返し、少しずつ理解していった。

こいつには、オレにはない才能がある。

悔しかった。悲しかった。

何よりもタイガが羨ましかった。

オレの方が先にバスケットを始めたのに。

オレの方が、バスケットを好きなのに。

何故あいつなんだ。

何故……。

気付いてしまったからは色々なものが自分の中で変わっていった。毎週の試合の中であいつと戦う度に鬱屈とした思いが積み重なっていった。

勝つたびにあいつへの優越感が沸き、負けるたびに憎悪にも似た感情が沸き上がった。

そんな風に感じる自分自身のことが嫌いになっていった。

そしてお互いの戦績が49勝49敗となったあの日。オレはある決意をした。

タイガとの決別。

ここまででは互角だった。だが、これからもそうとは限らない。オレはもう我慢ができなかった。決着をつける。そしてこの思いを終わりにする。

これ以上はオレの為にも、タイガの為にもならない。

兄弟としてではなく、ライバルとして。そして一人のバスケットボールプレイヤーとして。

優劣をつけたかった。

だがあいつは、オレの前から姿を消した。

オレは、あいつと戦うことはなかった。

(確かこの辺りだといっていたな)

その話を聞いた次の日の放課後に、オレはその東洋人の少年を探しに向かった。

タイガが帰ってきたのか。それを確かめるために。

だがストーリーをいくつか回り、知り合いから話を聞いていくうちに自分の期待が外れていることが分かっていった。聞く人物像はタイガとは程遠く、東洋人であるということ以外の共通点はほとんどなかったのだ。

それを知ったときは残念だったが、話を聞いていくうちに少しずつその人物に対して興味をわいていった。

その人物はなんでもここ最近になってこちらに来た日本人らしい。プレイにはどこか鬼気迫つたものがあり、その気迫に圧倒されるものもいるという。

だがそれでもそいつと戦った者たちはそろってこういったのだ。

——楽しかった、と。

(どんな奴なんだろうな)

目的の場所に近づくと親しんだいつもの音が聞こえてきた。ボールのはねる音やバツシユのスキル音。コートを囲む野次馬の歓声。ここに来ると気分が高揚してくる自分があるのが分かる。その気持ちを抑えつつ、いつもよりもどこか熱気のあるコートに近くにいた顔なじみに声をかけた。

「What happened?」

「Tastuya. After a long time」

「It's so. By the way, was there something? I think it rises」

「Yes. See there」

言われた方に視線を移すとそこにはloniをする同年代と思われる日本人の少年がいた。

どうやらちょうどシユートを決めた直後らしく、コート中央へと戻り仕切り直そうとしていた。

「Hey, Tomoya! One more time!」

「ははっ! よっしや! どんどん来いや!」

対峙する両者はお互いの力を認め合い、はたから見てもその勝負に対する入れ込みが伝わってくる。

どこか影を帯びた雰囲気を醸し出しつつも、重苦しいものはなくプレイに入り込んでいる。

その表情には笑顔が浮かび、とても楽しそうだった。

それを見てオレは羨ましいと思った。

いつからかバスケットをすることに息苦しきを感じるようになっていた。

タイガを倒す。そのことばかりに気がとられ、バスケットを楽しむことができなくなかった。だからこそどこか俺と似た雰囲気を持ちながらも、俺とは違うそのことが眩しかった。

気が付いたらオレは、そいつに声をかけていた。

それからオレと智也は意気投合し、この1ヶ月ともに切磋琢磨してきた。

智也はいつも楽しそうにプレイをする。自分が抜かれたりシユートを決められた時は悔しがるが、それを引きずらずに次は勝つ！という想いを前面に出してくる。戦っているだけでもバスケットが好きだというのがよくわかる。それに触発されてこちらにも自然と

笑みが浮かび、もつとこいつと戦いたいとそう思わせる力を持つていた。

オレもいつの間にか智也とバスケットをするのが楽しくなっていた。毎日のように対戦をし、毎日のように練習をした。次はどのように戦うかどうやって抜くのか、それを考えることがとても楽しかった。

前よりもバスケットが好きになった。

だからオレは智也に感謝している。

バスケットの楽しさを思い出させてくれたこと。

バスケットを楽しいと思わせてくれたこと。

何より、バスケットが好きだということを再確認させてくれた。

だからこそオレは力になりたかった。目の前のこの大切な友人のために。今度はオレがその力に。

「話してくれないか。智也」

「辰也さん」

真剣な表情でこちらを見つめてくる辰也さん。この一つ上の先輩はいつもものようにこちらを気遣ってくれていた。

「お前が今どのようなことで思い詰めているのかはわからない。だがお前が何かに悩んでいるということとはわかる」

「……」

「お前は初めて会った時からどこか影のある雰囲気を持っていた。プレイ見てもど

こか上の空となっている時があった。…そして戦う度に俺とその誰かと重ね合わせているということも」

そっか。辰也さんにはわかっていたのか。俺が戦う度に青峰と対戦相手を重ねていたことを。

「そのことに対してどうこういうつもりはない。だがもしそのことが今の智也の状態と関係しているというのなら、オレはお前の力になりたいんだ」

「……ありがとう、ごさいます。でも」

この申し出は正直有難かった。この人に事情を話せば、今の停滞したこの状況を打破することができるかもしれない。

だがそれでいいのだろうか。この人にはここにきてから何度もお世話になっている。これ以上この人に迷惑をかけることはしたくなかった。

言葉を返せずに口ごもってしまった俺を見て、辰也さんはため息を一ついた後に正面を向き、一つ間を空けてから話を切り出してきた。

「……オレはな、少し前までバスケットをすることが辛かった」

「え？」

信じられなかった。あれほどに美しいプレイをする人が、バスケットをすることを辛いと感じるなんて。

「オレには弟分がいた。小学生の頃に出会ったそいつをオレは実の兄弟のようにかわいがっていた。… そいつにバスケットを教えたのはオレだった」

「そいつはどんどん上達していった。小学生の時は気にならなかった。オレとそいつには大きな差があったから」

「だがそれは変わった。俺の方が先に小学校を卒業したことで一年もの間そいつとは会うことがなかったんだが、その一年という期間であいつは急激に成長した」

「あれだけあった差は、もうなくなっていた。再会したその日の対戦でオレは初めて負けた」

「信じられなかった。どこかオレの中ではあいつには負けないという思いがあったのかもしれない。負けてあれほど悔しかったのは生まれて初めてだった」

それはバスケットボールが好きで、ある少年の話。

「抜けたと自分では思っている抜けれない。決めたと思ってもブロックされる。逆に、こちらが止めたと確信を持っている抜かれるということもあった。…それを繰り返していくうちに、悟ったよ」

「こいつには、いずれ勝てなくなるって」

青峰と戦った、あの日のことを思い出す。対等だと思っていた相手が、遠い存在になつてしまつたと感じたあの瞬間を。

「嫉妬したよ。どうしてオレじゃないんだって。なぜあいつなんだって」

「こんなにバスケットが好きなのに、なんでオレにはそれが^{才能}がないんだって」

止めようとしても止められず、抜こうとしても抜けない。こちらの想像など遥かに超えていくその姿。

「それを否定したくてがむしやりに練習をした。いつからかバスケットがあいつを倒すための手段になつていった」

「どうにかして勝ちたくて。負けたくなくて。それだけのために」

「何よりそんな風を感じてしまう自分を認めたくなくて」

この話の彼と自分の姿が重なっていく。

「だけどそのままじゃ駄目だと感じた。あいつへの劣等感からバスケットを続けていたら、自分の中の何かが壊れてしまう」と

「その前に決着をつけるにした。こんな事じゃいけないと思つたから」

「しっかりとケリをつけることであいつとの関係をはつきりさせたかった」

どうしても諦められなくて。認めたくなくて。手を伸ばした。

例え先のない道だとしても、最後まで。

それはまるで、どこかの誰かのようで。

「結局決着をつける前にそいつはいなくなってしまったんだけどな」

ははっ、と笑い辰也さんは微笑みをこちらに向けた。

「今のオレがいるのはお前のおかげなんだ。智也」

「……俺が？」

身に覚えがなかった。辰也さんにはいつも助けられてばかりで、俺は何もしていない。むしろこちらが感謝をしているくらいだった。

「あいつがいなくなつてオレは目的を失った。練習はしていたがどこか集中仕切れなくて、ただ惰性で続けている面が強かった」

「そんなときにお前に出会った。ストリートで楽しそうにバスケットをする智也に」

「オレとどこか似た雰囲気を持っているのに、どこまでも楽しそうにプレイをする君に」

「眩しかった」

辰也さんはどこか感慨深げにその言葉を口にした。胸にてを当てながら、とても大切

そうにその思いを打ち明けてくれた。

「君のプレイを見てオレは君と戦ってみたいと思った。そうすれば今の自分を変えることが出来るんじゃないかって」

「その予感はずしかったよ。智也と戦ってオレはまたバスケットを楽しいと思うことができた」

「才能とか勝ち負けの為だけじゃなく、ただバスケットをするだけで楽しいんだって」

「オレはやっぱバスケットが大好きなんだって」

強く重く、そして優しく言葉を紡いでいく。

「だからオレは感謝してるんだ。この想いを思い出させてくれた智也に」

「だからこそオレは君の力になりたい」

「君ともっと、楽しいバスケットがしたいから」

そう話す辰也さんの瞳はどこまでも真剣だった。真摯で力強いその言葉はゆつくりと俺の心に染み渡っていった。

「辰也さん、実は——」

気が付いたら俺は、全てを打ち明けていた。

ここにきた目的や理由その全てを。

そして話しながらふと、こんなことを思った。

自分には実の兄弟などいないけれど。

もし自分に兄がいたのなら、こんな感じだったのだろうか、と。